

スポーツ団体女性登用の現状(上)

WSFジャパン代表 ニッ谷洋子

バルセロナ・オリンピックのあの熱気も、秋の到来と共に少しずつ冷めてきました。それにしても、冬のアルペールビルに続き、女子選手の活躍は素晴らしいかったですね。こういっては何ですが、日本選手団は女子選手に引っ張られているように見えます。日本のメダル第一号は、水泳の岩崎恭子選手(二百四十二歳)。周囲が予想もしていなかった金メダルでしたが、「今まで生きてきたなかで一番幸せ」というコメントに、思わずこちらも頬がゆるみました。

マラソンの有森裕子選手にも感心させられました。銀メダル獲得という「快挙」の後、スタンドから投げられた花束の一つを、優勝したEUNのエゴロウ選手に。死に物狂いでメダルを競ったライバルも、レースが終わればお互いに健闘を讃えあう。真のスポーツマンシップが、しっかりスポーツウーマンにも受け継がれていることを目の当たりにし、私は同性として誇らしく思いました。

前置きが長くなりましたが、オリンピックだけでなく、一般の人たちに身近な生涯スポーツの現場でも、多くの

女性たちが参加するようになり、指導者としても活躍しています。「女性スポーツの振興などという時代は、もう終わった」と断言する人さえ少なくありません。しかし、日本の女性たちが、果たして男性と同じように気軽にスポーツができるようになったのか、男性にはない女性特有の様々な問題(社会的問題、医学的問題、家庭的問題)などが解決されたのか。私自身が見聞した限りでは「まだまだ」です。

それを裏付けるデータとして、今回はスポーツ団体の女性役員の登用状況について、調べてみることにしました。五年前、日本体育協会(体協)と大韓体育会の比較をしたことがあります。(結果は機関紙11号に掲載)その後、体協の傘下にあった日本オリンピック委員会(JOC)が独立しました。WSFジャパンでは、日本のスポーツ界の指導的立場にある両団体に対し、三年前から女性役員の登用と「女性スポーツ委員会」(仮称)の設置を働きかけています。私たちWSFジャパンを含め、女性の声がどれだけ反映された組織なのか、ここで検証してみましよう。調査結果は左ページ下の表のとおり

です。いずれも平成三、四年度の両団体の名簿集をもとに集計しました。皆さんはこの数字を、どう解釈されますか。スポーツの表舞台での女性の躍進ぶりにくらべ「ずい分、少ない」と思われたのではないでしょうか。体協は女性が約三・七%、JOCは約四・二%です。

●門戸開放は超スローペース

たとえば政府は一九七五年の国際婦人年をキッカケに、国の審議会委員の女性の比率を引きあげようと、積極策を打ち出しています。三%だった女性委員を、八五年度までに一〇%に増やすというのが、当初の計画でした。しかし現実には、今年三月末現在で、九・六%にとどまっています。

さて、この数字をわがスポーツ界と比べてみましょう。国の審議会委員は九・六%が女性。これに対し体協の役員や委員のうち、女性は三・七%、JOCは四・二%。「スポーツ界って、本当に遅れている」と、何かにつけて私に感想を述べる人がいるのですが、残念ながら「その通り」なのです。

とはいうものの、遅れているスポーツ界が、少しずつ女性に門戸を広げ

るようになっていくことも、見逃してはいけません。五年前の体協(JOCを含む)は、女性の登用率が一%にも満たなかったのです。それを思えば、ゆっくりではあります。日本のスポーツ界も、女性の存在を認めてくれる方向にあると、いえなくもありません。

今回は体協、JOCだけでなく、両団体に正式に加盟している各競技別の計四十九団体も調べてみました。理事会、各委員会に女性が登用されているかどうか、目下、集計を整理しているところです。団体によって、理事の数に会長を含めたり含めなかったりなど、役員と呼ばれる人たちのフクが異なるため、まとめに少々時間がかかりました。

しかし、それより何より大変だったのが、各団体の事務局からそのデータをもらうこと。八月の後半、二週間をかけて事業委員会の飯田さんと、編集担当の山本さんの二人が引き受けてくれました。約五十の団体に電話をし、協力的なところへは、詳しいデータを送ってくださるよう、ファックスで質問表を送り、戻ってくるのを待ちます。そこまでいけば上出来。半数の団体は

女性の社会進出のバロメーターの一つは、組織の上層部にどれだけ女性が登用されているか、によって判断できません。女性が活躍のスポーツ界は?

このような基本的データさえ外部には公表してありません。ひどい団体になると「何のために、そんなコトを調べるんだ」と、まるでこちらが悪事でもたくらんでいるような応対ぶり。

このような女性に関するデータ提供に限らず、体協、JOCをはじめとするスポーツ団体は、所轄の文部省やマスコミにはいい顔するのですが、ふだんはあまり縁のない企業や一般の人たちに対しては、文字どおりケンもほろろの場合が少なくありません。「スポーツ・フォア・オール」(体協)「オリンピック・ムーブメント」(JOC)を、より多くの人に訴えたいなら、もっとオープンであるべきでしょう。

話は横道にそれましたが、各競技団体の現状は次回、お伝えします。米国のWSFの同様のデータと並べて、比較してみたいと思います。

●予想以上の重責「紅一点」

さて、スポーツ団体の役員や委員というものは、実際にどんな仕事をしているのか。最後に私自身の体験を述べてみましょう。

昨年四月、JOCは体協から完全に独立し新しい組織としてスタートしました。そして、私は企画専門委員会の委員に選ばれました。ここでは、オリンピックの支援イベントやロゴマークのマーケティング、機関誌「オリンピック」の編集方針など、JOCが取り組んでいる新しい企画のほとんどが検

討事項になっています。

月に一回、約二時間の会議。たいてい午後三時か四時に始まりです。さらに私は、委員会の中に作られた二つのプロジェクトに加わることになりました。「オリンピック企画編集班」と「オリンピック・テララン実行班」です。いずれも月一回でいどの会議があります。このうち企画専門委員会は十五人の委員中、女性は私だけ。「編集班」も六人中の紅一点。「テララン」は十二人のうちバレーボールの荒木田裕子さん(WSFジャパン会員)とシンクロの元好(現姓〓本間)三和子さんがいてくれるので助かっています。

というのも「紅一点」の会議の場合、私が欠席すれば当然のことながら、女性はずゼロ。会議で話し合われる事の全てが「女性」の立場を主張する必要はないのですが、女性が誰もいなければ問題に気づくことさえできないのです。WSFジャパンの活動を通して、十年以上、女性の視点でスポーツ界の問題を取りあげてきた私にとって、JOCの委員会は、女性を代表してモノをいう場もあるのです。とはいえ、正直なところ会社の仕事を放り出して、月に最低、三回の会議。しかも、これは交通費も出ないボランティア。「テララン」の出張では、初めて日当三千元が出ました。「男性にとつてさえ、スポーツ団体を支える活動は、容易でない」というのが、私の実感です。

体協・JOCの役員と各委員会の女性登用状況

■(財)日本体育協会

委員会名	総人数	女性
理事会	28	1
評議員会	106	1
国民スポーツ協議会	13	3
国民体育大会委員会	31	0
財務委員会	4	0
財務専門委員会	15	0
企画運営専門委員会	10	1
施設運営専門委員会	7	0
国民スポーツ専門委員会	18	2
スポーツ科学専門委員会	23	1
指導者育成専門委員会	17	1
計	272	10

※N・T設置委員会=ナショナル・トレーニングセンター設置委員会
 ※日本体育協会は平成3年9月1日現在、日本オリンピック委員会は同9月20日現在

■(財)日本オリンピック委員会

委員会名	総人数	女性
評議員会	61	2
理事会	25	1
選手強化本部	55	2
夏季対策専門委員会	13	0
冬季対策専門委員会	6	0
科学・情報専門委員会	17	0
選手会	13	5
総務委員会	58	2
財務専門委員会	8	0
国際専門委員会	6	0
報道専門委員会	7	1
企画専門委員会	15	1
マーク専門委員会	12	1
日本ユニバーシアード委員会	32	0
N・T設置委員会※	15	0
選手強化キャンペーン委員会	17	0
計	360	15